

序言

本書は近代という時間において、多様な領域にわたる学問がいかに成立し、展開してきたかを考えようとするものである。制度論的な側面や歴史的経緯に光をあてながら、ふりかえり、新しい展望をえようと意図する。

このような意図をもった書物には容易に予想される反応であるが、制度論的な側面というところ、私の領域とは無縁だ」「研究対象と何の関係があるのか」とアレルギー反応を示す人も多い。しかしながら、冷静になってみてほしい。研究する主体の〈眼〉には、当事者が意識しない〈フィルター〉が入っていないだろうか？ そういった〈フィルター〉とは制度の中で形成され、我々の〈眼〉を知らず知らずのうちに覆ってきたものである。^(注) 研究する主体が特定の時代や環境に生きていくかぎり、無縁ではありえない大きな問題なのである。

近代という時間の中で編成と展開を繰り返してきた学問は、今日の我々の学問に直結するものである。前者は後者にとって〈フィルター〉のような役割を果たしている。

「ものごとを捉えるときは土台から考えた方がよい。ことに混乱を極めている状況なら、頭の整理にはそれが一番効果的である」といったことを念頭に置きつつ、シンポジウムを行ったことがあ

る。本書の母体となった「近代学問の起源と編成」なるシンポジウム（早稲田大学高等研究所、二〇一〇年三月十三日～十四日）である。他分野との対話の中で、研究する我々自身の〈眼〉の構造の解明を進めるべく、一度カメラを大きく引いて近代学問の全体像を捉え、同時に我々の足下の地層を分析するという観点から構想されたものであった。

その成果として、①前近代の学問環境、②西洋の学問の受容の仕方の多様性、③編成という側面から近代学問全体を捉える視点、④現在の学問の置かれた状況、などという非常に有意義な課題をえたが、同時にこうした問題を扱う研究者のあいだでも、近代へのスタンスが一樣ではないということも明らかとなった。すなわち、近代の再評価を目指すのか、近代批判という方向へ展開していくのか。一冊の書物を一個の紙の爆弾と考えれば、一つの方向へと絞り込み、強いテーマ性を打ち出すというやり方が理想的であり、戦略的であるのかもしれない。しかし、そうしたインパクトを受け止める土壌は、研究者のあいだでもいまだ整っていないというのが現状である。

そこで、本書はさまざまな領域間での「近代」と「学問」をめぐる諸問題を検証し、そこから浮上する多様な論点を提示することを先決事項と捉え、共通の地図となるべきものを作り、そこから今後の学問を考えるための提言を行おうと考えた。本書が雑多な論文の集合体ではなく、ポリフォニックな一冊の書物として読まれることを祈る。

編者がこうした着想をえたのは、東京国立文化財研究所が主催した国際シンポジウム「今、日本の美術史学をふりかえる」（一九九七年十二月）にはるかな源がある。この国際シンポジウムを書籍化した東京国立文化財研究所編『語る現在、語られる過去——日本の美術史学一〇〇年』（平凡社、一

九九九年)の冒頭、国際シンポジウム事務局による「報告書まえがき」を少し引いてみよう。

そもそも美術という言葉自体が、翻訳語であり新たに移入された概念であったように、美術史学で日常的に使われる用語や分類・思考の枠組み自体は、明治以来、西洋近代の翻案と過去の再構築をめざすなかで、新たにつくられたものである。そして何よりも、美術史上の言説のなかで、それらが意識化されない制度として今も大きな影響力を働かせていることは、美術史にたずさわる研究者が広く認識すべき重要な課題であるといつてよい。

いささか私事を述べると、この一文を読んだのは十三年前だと思われる。日本文学の博士後期課程に在籍する、ぼんやりした院生であった私は衝撃を受けた。文学はいうに及ばず、諸学をも巻き込む重要な問題提起であることに気づいてしまったからである。濃淡や粗密といった程度の問題こそあれ、ここに書かれた「美術」「美術史学」に、さまざまの言葉を代入することが可能である。ところが、この問題意識は共有されている領域と全く共有されていない領域とがあった。私は文学と絵画にまたがる領域を考えてみたいと欲張っていたので特に感じたのだと思うが、温度差は歴然とあった。そして、北澤憲昭『眼の神殿』(初刊一九八九年)などこの潮流を起こした源へと溯っていった。……

歴史的な展望に立てば、ほぼ同時期に文学・語学・史学など前近代を対象とすることが求められる他領域でも行われ、一九九〇年代以降の注目すべき動向の一つとなっていた観がある。しかし、個別の領域に目をやると、今なお「近代を問い直す」という問題意識は充分に共有されていないと

考えられる。とりわけ、古い時代を扱う研究者が、あたかも自分の研究を否定されたかのような嫌悪感を示したり、あるいは前近代研究にとつて「近代を問題とすることに、何の意味があるのか」と疑問視されたりすることもある。そういった人にこそ、本書を手にとつてもらいたい。

学制（明治五年八月二日太政官第二四号）発布より一四二年目の夏

井田太郎

（注）「覆ってきた」と書くマイナスの意味をもって響くが、必然性があつて「覆ってきた」ものもあるだろう。この「覆ってきた」には価値評価を読み込まないでほしい。

目次

序言.....井田太郎 (1)

●総説●

近代学問の起源と編成.....藤巻和宏 1

第一章 近代学問の起源と展開

近代国学と人文諸学の形成.....藤田大誠 43

明治期における学問編成と図書館.....長尾宗典 62

近代学術と漢字翻訳語——日本と中国における「合衆国」の展開.....千葉謙悟 83

近代日本のフランス語教育の起源と編成——宣教師の果たした役割.....西岡亜紀 107

神話学の「発生」をめぐる——学説史という神話——	平藤喜久子	133
近代日本における政治学の二つの起源と編成……	飯田健	150
経験知から科学知へ——高等農学教育における英国流からドイツ流の選択——	熊澤恵里子	169

第二章 近代学問の基底と枠組み

近代科学の起源——本質を探求する学としての科学——	森田邦久	201
宗教史研究の近代性——欧米におけるキリスト教と近代化をめぐる宗教社会学理論から——	杉木恒彦	222
アンリ・ピレンヌと近代史学史の十字路……	青谷秀紀	245
〈実証〉という方法——〈近世文学〉研究は江戸時代になにを夢見たか——	井田太郎	272

第三章 学問の環境と諸問題

フランス近代詩と学問——「ボードレル研究」の確立を例に——	倉方健作	301
日本発沖繩經由アジア行の視点——海域アジア史の視点をめぐる断章——	高江洲昌哉	322

近代経済学とマルクス経済学——我が国経済学界における受容と対立の歴史——	齋藤隆志	342
日本の美術史学の展開過程とその特徴——一九一〇～五〇年代の学術研究化——	太田智己	364
「文化情報資源」をいかに活用していくか		
——博物館・図書館・文書館が連携し合う時代の学術情報流通——	岡野裕行	388
学問領域と研究費——日本中世文学という辺境からの覚書——	藤巻和宏	409
あとがき	藤巻和宏	435
執筆者一覧		441